



# やらぬ仲



桜井真理

渋谷駅から東横線で二十分ほどのところに日吉駅がある。横浜方面に向かって左手の銀杏並木から、慶應義塾大学日吉キャンパスが広がっている。

私は彼との出会いを覚えていない。何かの授業が一緒だったのか、誰かが紹介してくれたのか、どちらかが声をかけたのか。彼は「志木高」、私は「女子高」と呼ばれる大学付属高校出身で同学年だが、高校時代はお互いを知らなかった。

彼、宇佐美文也君と親しくなったのは大学三年のとき三田キャンパスでゼミが一緒になってからだ。でもその前、日吉の頃から面識はあったと思う。「十文字さん知らない人はいないでしょ」と宇佐美君は言うかもしれない。

私は当時全盛だったテレビ深夜番組の「オールナイターズ」や、雑誌「JJ」に出てくるような女子大生ファッションが嫌いだった。ロンドンに憧れ、パンク好き、オゾン・コミュニティやコム・デ・ギャルソンなどのDCブランド好きで、人目を引く格好で登校していた。

体育会系の男の子たちは私を「シンディー」と呼んでいた。シンディ・ローバーからとったシンディーらしい。そんなふうに出立つので、宇佐美君は私が彼を知る前に、私を知っていたのかもしれない。

自慢ばかりしているようだが、宇佐美君と私が所属していた猿木ゼミは、入るのが結構難しい。法学部政治学科の中では有名教授のゼミと並んで人気があった。

それは研究分野がマスコミュニケーション論とか記号論とかマルチメディア研究といったものであり、なんとなく就職にも有利そうで、よくわからないけど面白そうなイメージがあっのどと思う。

入ゼミには、マートンの「社会理論と機能分析」に出てくる社会学用語「準拠集団」についての研究ノート、課題図書「パレスチナとアラブ人」「日本のジャーナリズム」「欲望の図像学」のうち一冊を選んでレポート、自己紹介・志望理由の提出と、さらに試験・面接も課せられていた。

一次選考はゼミ生と大学院生たちに任されている。成績の悪い私が受かったのでみんなに訝られたが、学生が選ぶので必ずしも成績第一ではない。そして私には大きなコネがあった。大学職員である私の母と猿木先生は飲み友達であった。

ゼミの同期は女子が私を含めて十二名、男子は宇佐美君を含めて十名だった。私たちの代はみな仲が良かった。週ニコマ授業があり、サブゼミといって週一コマ、興味のある分野に分かれる研究会もあった。

飲み会やら合宿やら学園祭の準備やらで一緒にいる時間が多い。サークル活動をしていなかった私にとって、猿木ゼミはやがて「所属集団であり準拠集団でもある」と言えるような存在になっていった。

これは全く自慢にならないが、私は初めの授業から遅刻ばかりしていた。もともと私は時間にルーズで、小学校の頃から登校時間を守れなかった。猿木先生にまで注意される始末だった。直らなかった。

遅刻はする、態度はでかい、勉強はできないくせに喧しいでゼミでも目立つ存在だった。私はみんなの優しさに甘えていた。

宇佐美君は初めのうちはクールだった。「僕は他に約束があるから」と言って飲み会にもあまり顔を出さなかった。

最初に宇佐美君と仲良くなったのは、中本っちゃんだった。彼女はテニスサークルに入っていて、日に焼けていた。背は大きくないが華奢な感じではない。黄色とか水色など鮮やかな色の服がよく似合う、活動的でパワフルな女性だ。海外一人旅の経験が多く「地球の歩き方」検証篇

といった趣の写真を見せてくれたりする。

宇佐美君は面白がっていつも中本ちゃんと話していた。

「へえー、すごいね。それでそれで、その後どうなったわけ？」

「だからね、私は高山病になりながらドライ・ラマに会いに行ったのよ。」

「ええ、マジ？よくやるなあ、ホントに会えたの？」

「会ったよー。」

「おいおい、すごいなあ。なかなか会えるもんじやないんでしょ？で、どうだったの？」

宇佐美君は彼自身の話も面白いが、聞き上手で誉め上手でもある。会話が楽しい男の子だ。

ある秋の日、私は中本ちゃんから「ゼミの中に好きな人がいる」と聞いた。多分宇佐美君だろうと思った。

私はゼミでは清田君がいいなあと思っていた。清田君はゼミ代（表）で、顔は精悍で怖いけどしやべり方や発言は穏やかで優しい。

「真理ちゃん、俺こう思うんだよね。なんかさあ、俺、変かなあ？はははは」  
笑うときに口に手を当てる。照れ屋で真面目なさわやか君だ。

とは言っても私には、喧嘩ばかりしているけど大好きな彼氏がいた。大学のクラスが一緒だった林君。それは清田君に対する「いいなあ」とは全然違っていった。

清田君にも彼女がいた。しかし清田君は彼の方が彼女より半年年下であるために、彼女の両親に交際を認めてもらえないと悩んでいた。現代版「野菊の墓」か。今時信じられない感覚だった。

ゼミ仲間たちは十一月にある三田祭という学園祭の準備で忙しくなっていた。研究会発表の今回のテーマは「東京」だ。私は宇佐美君と川口君とチームを組んで、人気テレビドラマ「北の国から」を素材に、「都市」と「田舎」、「ハレ」と「ケ」といった言葉を使って「東京」を捕えようとした。

みんなで集まって調べたり議論したりすることも増え、食べたり飲んだりするうち泊まり込みになることもあって、なかなか大変な作業だった。

川口君という人は、大きな目でこちらをじっと見つめながら「ねえ真理、なんで女と男は服のボタンの合わせが逆になってるか知ってる？あのね、男が女を脱がしやすいように出来ているんだよ」と言ってニツコリ笑ったりするのだ。

ぱっと見はさわやかヨットマンに見えないこともない。しかしその発言は男尊女卑の臭いがあり、えげつない。

「気持ち悪いなあ、やめてよ」

「なんでだよ、真理」

更にエスカレートしていくのが常だった。呼び捨てにされるのも不快だった。

三人グループでの作業も追い込みとなって、川口君の家に集まることになった。川口君は綾瀬の方に妹とこ人で住んでいた。

「妹の生理日ってお風呂の臭いでわかるんだ」

また気色の悪いことを得意げに言う。そして私に風呂に入れとさかんに奨める。断ると理由をしつこく聞いてくる。誰が入るか。

そんな川口君の妹は川口君よりずっとしっかりしている。必死で原稿を書く私たちに夕食、夜食、朝食まで作ってくれた。

「ピザでもどうですか？」

有り難いが私はチーズが大嫌い。牛乳・卵とともに幼い頃のアレルギーが原因だ。

「ハムサンドは？」

ごめんなさい、ハム・ベーコン・コンビーフ・ソーセージの類もダメなの。

「チャーハン作りましょう」

細かい卵は取り除けないからねえ。

「じゃあ、かきたま汁もダメですね。オカカのオニギリなら大丈夫ですか」

ひえー、カツオ節も苦手なの。

これには川口君の「なんでなんで攻撃」も一瞬止んだ。結局私は川口君の妹が作った料理に口をつけることが出来なかった。申し訳なく思った。

帰りの車の中で宇佐美君は私を叱った。

「あんなに一生懸命考えて作ってくれたのに、ひどいじゃないか。食べよ、吐いてでも俺だったら食うね。有り難くて泣きながらでも食うよ」

クールなふりしてるけど実はハートの温かい人なんだと、その時初めて知った。

翌日は文京区白山の宇佐美君の家に、他のグループも作業と議論のために集合した。私と川口君とのお互い一步も引かない激論は続いていた。連日のストレスで川口君と顔を合わせるのが苦痛でたまらなくなった。

冷静に話を聞いていた「比良りん」が個別に説明をしてくれて、私もやっと落ち着いてきた。みんなにとんだ醜態をさらしてしまったと激しい自己嫌悪に襲われた。こんなに力を込めてやる事でもなかったのではと反省したりもした。

この頃宇佐美君と中本っちゃんの関係も変化していた。中本っちゃんは宇佐美君に思いを告げた。だが、宇佐美君には中学の頃から付き合ったり別れたりを繰り返している彼女がいた。

中本っちゃんも大変な人を好きになっちゃったね、と同情した。彼女がいるということだけではない。宇佐美君は自分のスタイルを持っているから、女性にも厳しいことを言う。

彼は恋愛にのめり込んだりしない。「好き?」「好きだよ」と囁きあってべったり一緒にいるようなことはできない。宇佐美君と幼馴染の彼女との付き合いは、「ただの友達とどこが違うの?」と聞いてみたくなるほどあっさりしているように思えた。

中本っちゃんの気持ちが盛り上がるのに反比例するように、宇佐美君が露骨に中本っちゃんを避けるようになった。中本っちゃんの動揺ぶりは傍目にも激しくて、私は心を痛めた。

いよいよ三田祭前日、宇佐美家のリビングと客間をゼミのみんなで占拠して、最後の追い込みが始まった。

教室内に張り出すために模造紙に研究成果を書く。デザインにうるさい大男菅井は、手分けをして手書をするのを許さない。

今では笑い話だが、当時の頭の悪いワープロを使って、文章ではなく、いちいち文字を拡大して単語ごとにプリントアウトする。単語を切りとって模造紙に貼り付けていく。これは気の遠くなる作業だった。

ワープロが違くと字体が異なる。持ち寄った東芝ルポ2台がフル回転した。一文字の印刷時間は今の何倍もかかった。作業は深夜になっても終わらない。

夜食に宅配ピザをとるようになった。またしても大の苦手なチーズだった。しかも

十五、六人分と大量に届いた。私はその強烈な臭いを避けるために、一人で宇佐美君の部屋へ逃げた。

部屋は良く片付いていた。黒っぽいベッド、机、グレーのカーペットがいかにも男子の部屋だった。机の上には窓があった。季節を問わない厚さのブルーの布カーテンがかかっていた。ブルーのカーテンは開いていて、ストライプのレースのカーテンは閉じていた。

「このお向かいが彼女の部屋か」

私は宇佐美君の椅子に膝立ちになって、レースのカーテンに手をかけて少し開けてみた。ほんの僅かな距離にある向かいの窓は出窓だった。部屋の明かりはついていない。

よく見ると向かいの部屋の窓もレースのカーテンだけが閉じていた。レースの模様は女の子っぽい花柄などではなく、渦巻と曲線の不思議な柄だった。

宇佐美君の彼女は「お隣さん」だった。いわゆる隣家ではなく、入る路地は別の住宅だった。それぞれの家屋の奥まったところにある子供部屋が、向かい合っているという。

ゼミの飲み会でその話を聞いた。  
「宇佐美君の彼女ってどんな人？」  
「隣の子だよ」  
「幼馴染か」  
「中学のときから付き合ってるからね。そうも言えるけど、初めから隣に住んでたんじゃないよ。中学卒業して、しばらく別れてた時期があって、彼女から『引越した』っていう電話があってね、住所を聞いたら『なんか近そうだね』って。そしたら隣のブロックだったんだよ。しかもいわゆる裏の家」  
「狙って引越してきたのかね？」  
「そういう策士ではないね」  
「そんなことがあるんだねえ」  
「同じ中学で付き合い始めて、別れたり、また付き合ったり、そんな感じよ」  
「家族ぐるみのお付き合いとか？」  
「いや、まあ知ってるぐらいのものよ、親同士は」

あのカーテンの向こうはどんな部屋なんだろう。目を凝らしても暗くてよく見えなかった。そろそろみんなもピザを食べ終わった頃だろう。下の階に戻った。

うんざりするような作業は三田祭当日朝まで続いた。

三田祭は四日間、交代で研究発表の教室に詰め、見学に来た人に説明をする。私の担当は初日と三日目だった。

今にして思うと、私はこの頃睡眠不足とストレスで少しおかしかった。

三田祭二日目は研究会発表とは全く関係ないが、朝から学校に来て、メインステージで練り上げられるイベントを見続けた。

ダンスサークルの発表や、ミスコンや、お笑いを見ていた。それは一番前の席を確保するためだった。私のお目当ては、間もなく公開される映画「私をスキーに連れてって」のキャンペーンイベントに登場する俳優三上博…ではなく、原田知世ちゃんだった。

私はデビュー当時から彼女のファンだった。繊細で寂しそうなんだけど、強さを秘めている。甘すぎない顔立ちも、すっきりした髪型も大好きだった。

三田キャンパスの周りには花屋が多い。私は知世ちゃんに渡そうと、名前も知らない変わった花を持っていた。フィフティーズのマイクのように大きくて、一輪だけど両手で抱えるほど重たい。

それを持って、ミルクの白いジャンパースカートに茶色い大きな襟の短いコートを着て、朝からステージ最前列で待機する女。危ない。

いよいよ知世ちゃん登場。黄色い声はもっぱら三上博に向けられていた。私の目は知世ちゃんに釘付けだった。実物はやはりかわいい。

イベントはあっという間に終わり、知世ちゃんが手を振る。私は花束を差し出す。スタッフに制止される。「イヤ！知世ちゃん！」と叫ぶ。知世ちゃんが近づいてきて、花を受け取って「アリガトウ」と囁く。感激のあまり泣く。かなりヤバイ、いっちゃってる人だ。一緒に見ていたゼミの美咲は驚きながらも「よかったね」と言ってくれた。

三田祭最終日、翌日の打ち上げと飲み会が続いた。中本っちゃんは介抱のしようがないほど荒れていた。

私はゼミの担当教授である猿木先生に遅刻をひどく注意された。授業にも遅れるが、みんなで勉強会というときに何時間も遅れたりするから当然だ。先生は優しくかった。それでも「二度としません」と言えない自分が情けなかった。

いろいろあったが、三田祭を無事終えて、みんなの関係は深まった。「ゼミの同学年仲間」としてのまとまりが出てきたように思えた。

私にとって宇佐美君は「面白い男の子」だった。女子高の仲間とゼミの男の子で合コンを企画した。私の手際の悪さで男子は宇佐美君と菅井だけ。なんともしょぼい合コンになってしまった。だけど私はその後宇佐美君と白山ラーメンを食べて、車で家まで送ってもらったのが楽しかった。

当時の彼氏林君に対する後ろめたさは、少しあった。でも「それだったらもっと私と遊んでくれればいいんだ」と思った。彼は体育会系クラブ活動が忙しい真面目な学生で、私と深夜に遊び歩いたりすることは無かった。

林君と宇佐美君はお互いの存在を知っていた。ゼミの飲み会に林君を連れて行ったこともあった。林君にも会

いたかったし、ゼミの飲み会を欠席するのもいやだったからだ。私の我がままで、林君とゼミのみんな、双方に気まずい思いをさせてしまった。

「だけど今夜の事については、こういう言い訳もできる。「ラーメンを食べて送ってもらうのは『デート』ではない。」

「なんで林君なの？」  
その夜宇佐美君が私に尋ねたのも、特別私に気があったわけではないだろう。しかし私は宇佐美君に向かって「好きだもの、林君は周りにいるどの男の子より一番素敵」とは言えなかった。林君は「好き好き大好き」、宇佐美君は「好き」。そういう違いだった。



八十年代後半の学生カップルのクリスマスの過ごし方といえば、フランス料理に、高価なプレゼントに、シティホテルでお泊りが定番だった。

その年のクリスマスイブはホテルのスイートルームでパーティーを企画した。どこのホテルもいっぱい、予約を入れるのに苦労した。

女子高仲間が、彼のいる子はそれぞれの彼氏を連れて、フェアモントホテルに集合した。フェアモントホテルは皇居のお堀の桜で知られた、落ち着いた雰囲気のホテルだった。

八人の男女が「乾杯クラブ」ゲームで盛り上がっている部屋には、何度も苦情の電話が入った。

私と林君と、もう一組のカップルが部屋に泊まった。夜中にホテル近くを林君とこ人で散歩した。楽しいクリスマスイブだった。

クリスマス当日、四人でお昼を食べて林君を送って、私は夜アルバイトで銀座にいた。

十一時、銀座の街はカップルだらけだった。バイトを終え、一人駅に向かうのは寂しい限りだった。私は宇佐美君の電話番号を覚えていた。駅の緑の電話の受話器を取った。一度覚え方を聞いたら忘れられない、彼の電話番号を押してみた。

宇佐美君のフットワークの良さは、体育会系の林君より数段優っていた。私と宇佐美君は美しくライトアップされた銀座和光の前で落ち合った。横断歩道を渡り始めたとき

「ちょっと待って」  
宇佐美君はシャンパンのボトルとグラスを取り出した。

「メリークリスマス！」  
二人は銀座四丁目の交差点の横断歩道の白い線の上で乾杯をした。青信号が点滅し始めた。グラスを手に持った腕を、宇佐美君に引っ張られて走った。笑った。

宇佐美君が乗って来た車の中でもグラスを傾けた。  
「大丈夫かな、運転中に」

「平気平気」  
こういう大胆さも宇佐美君の魅力だ。

車でお台場に向かった。お台場は広大な空き地が続いていた。お台場公園には他の車が何台も止まっていた。公園の街灯は少なく、海の向こうから届く明かりを頼りにシャンパンを空けた。寒かった。

その頃ウォーターフロントなどといって東京湾岸のおしゃれなお店が話題になっていた。私は「WANGAN」という店に行ってみたかった。念願だった。

行ってみると内装、インテリアもメニューも普通でたいしたことない店だった。夜景は確かに美しかった。

宇佐美君はいろいろな女の子との恋愛経験やH話を語った。嫌な気分は全然なくて、楽しかった。

「女の子と別れ話になったんだけどさ、一瞬何が起きたのかわからなかったんだ。気が付いたらメガネが落ちて壊れてた。激怒した彼女に殴られたんだ。その女の子、卓球やっててインターハイ出場経験があってさ、すげえ威力なんだよ。しかも早くて全然わからない。卓球のスマッシュ。バシッ！って」

「あとね、浮気がばれて手帳を取り上げられたのは参ったね。取り戻しに行ったよ。彼女の実家に忍び込んで泥棒？それは向こうでしょ。だって俺の手帳を持っていったのは彼女だよ。」

実は彼女のうちは旅館をやっている、入るのは比較的簡単だったのね。でもさ、彼女の部屋がよくわからなくて、大変だったよ。見つけたけどさ、俺？俺は見つからなかったよ。」

宇佐美君ほどの経験はない私も、何か話したくなった。

「じゃあ、お返しに私の秘密を教えてあげる」  
「なにになに？」

「私の初めての人は誰でしょう？」  
「えー！僕の知ってる人なの？まじ？」  
「うん、知ってると思うよ」  
「誰だあ？もちろん慶應の人でしょ？」  
「今は違う」  
「てことは辞めちゃった人か。で、それはいつ頃の話なの」  
「高一。高二になる前の春休み」  
「ということはもしかして志木高出身か？」  
「ふふふ」  
「そうかそうか。志木高で、辞めちゃった人っていうと・・・」  
「大窪さんだよ」  
「大窪？えー！あのパンクの大窪さん？そうかあ、あの人かあ」  
「面白い？」  
「面白い面白い」

喜んでもらえたのは良かったが、あの恋は辛いものだった。

志木高の二年生だった大窪さんに一目惚れした私は、「初体験はこの人」と決めていた。パンクバンドでボーカルをやっていた大窪さんにとって、私は「追っかけ」でしかなかった。適当に遊ぶにはいいか、程度の女の子だ。

大窪さんは、中山美穂似の女子高の先輩にぞっこんだった。パンク野郎がお嬢様に惚れたって、所詮かなわぬ恋かと思われたのに、彼の猛アタックでこ人は付き合い始めてしまった。

私はずっと大窪さんが好きだった。彼が大学を辞めて親が離婚して引越したと聞いて、どこかで会えないかと人ごみの中でいつも彼を探していた。

この話を林君は知らない。朝六時、宇佐美君に家まで送ってもらって終わった、このクリスマスの夜のことも林君は知らない。

翌年になって、林君と一緒に行ってくれないなら宇佐美君と行っちゃうよ、と言ってカップル数組とスキーに行く計画が持ち上がった。結局男の友情が発揮されて計画はおじゃんになった。宇佐美君に悪いことをしてしまった。

林君はスキーに他の人と行くのも、アルバイトも夜遊びもやめろとは言わなかった。人は優柔不断とか弱いとか言うかもしれないが、本当は勇気があることだ。私を信用しているからできること、束縛するよりずっと男らしいと思った。だから林君に対する私の罪悪感は希薄だった。

宇佐美君はいつも彼の華やかな女性関係の話をした。彼にとって女の子を落とすのはゲーム、彼が得意とするマージャン、将棋と同じなのだろう。それでも彼が一番好きなのは「隣の子」だというのはわかっていた。

春、大学四年になった。昨年私たちが受けた入ゼミ試験を、今度は試験官となって評価する立場になった。この両方の立場を経験するのは、これからの就職活動に活かせる。ゼミ生に入ゼミ選考を任せるのにはそういう意味もあった。

私は「就職どうするの」と人に聞かれて、急にイギリス留学を思いついた。親にも猿木先生にも反対された。だが話をした時には既に決めていた。もう手続きに動き始めていた。

林君は私の決心を寂しく思っていただろう。彼の体育会クラブ活動は終わった。就職活動も「空前の売り手市場」と言われ、難なく第一志望の会社の内定を得た。

夏休み前の前期試験が終わった。私のお別れパーティーは山食と呼ばれる学生食堂に三十人ほどが集まってくれた。女子高、クラス、ゼミ、もう一つの付属の男子校である塾高出身の仲間たち。パーティーには林君も宇佐美君も、後に長く付き合うことになる椋田君もいた。

離日までの十日間、林君と会えるだけ会った。サザン・オールスターズのコンサートに行った。隅田川花火大会に行った。プール付きのゴージャスなラブホテルに行った。八月二日、旅立ちの日は成田空港まで送ってくれた。握手をして別れた。

私はイギリスから頻繁に手紙を書いたが、林君の心はだんだん離れていった。何人もの友人が卒業旅行で私を訪ねてくれたが、林君は来なかった。「君に興味が無いので行かない」という手紙が来た。

ならば私の方が帰ることにした。私は今年卒業するのではないが、みんなともお別れが言いたかった。

修善寺で行われるゼミ合宿の日程に合わせて帰国した。比良りんが成田に迎えに来てくれて、卒業旅行帰りの菅井と一緒にラフォーレ修善寺に直行した。

林君には帰宅してから連絡した。再会した時は何も変わっていないような気がした。彼よりも彼の両親が私を激しく嫌っていた。彼は長男で両親には逆らえない。「今好きなだけ。結婚しようっていうんじゃないんだから、いいじゃない。」  
「先のない付き合いはやめろって言うんだ」

宇佐美君にその話をした。  
「十文字さん、まずね、その格好を何とかしないと。普通の格好をしろよ。さわやかなストライプのコットンのシャツにジーンズ、スニーカー。みんなが着てるようなものを着るんだよ。ポロシャツの襟を立てたりさ。嫌かもしれないけど、やってみろって」

そして黙っていればいいものを、私はまたそれを林君に話してしまった。  
「真理ちゃんには無理でしょう」  
「できない」

違うタイプの二人だから面白い、それだけじゃあダメなのか。

卒業式の晩は新高輪プリンスホテルで園遊会があった。学生生活最後で最大のパーティーだ。私はロンドンで知り合ったパタンナーのサヨリさんに作ってもらったドレスで臨んだ。評判だった。林君は着物で登場した。似合っていたが二人はアンバランスだった。

園遊会の後はゼミの部屋、林君のクラブの部屋、女子高仲間の部屋を徘徊して大騒ぎは朝まで続いた。一つのベッドで何人もが入れ替わりで寝たりした。

林君は最後は猿木ゼミの部屋で私と一緒にいた。ツインルームの一つのベッドに入っていた。パーティー衣装は脱いでいたが、洋服は着ていた。

部屋には宇佐美君と菅井と比良りと、宇佐美君が「俺の舎弟」と呼ぶ小野君もいた。この不思議なメンバーと一緒にホテルの朝粥を食べた。

ホテルを出て私は林君と、映画「赤いコーリヤン」をやっている渋谷のユーロスペースに行った。眠くて全く見ていられなかった。さっきまでベッドでまどろんでいた心地よさへの誘惑は抗し難く、二人は行きたいところへ行ってしまった。

私は求められたのが嬉しかった。何も変わっていないように思った。しかしそれは錯覚で、林君の別れの決意は覆せなかった。

彼の両親がなんと言っているとか、彼は何故別れたいのかと聞いてもどうしようもない。彼は私のことがそれほど好きじゃない、それだけのことだ。

それでも林君は親切だった。再びイギリスに行く私を成田まで送ってくれた。ユーミンの「リフレインが叫んでる」が空港中に響いているように感じた。

お互いの頬にキスして、握手をして、別れた。この曲にグルグル巻きにされて何組のカップルが、この春ここ

で別れていったのだろう。

六月にはまた日本に戻る予定だった。林君と別れて傷心の私は早く立ち直りたいと思った。ある計画を立てた。

私のお別れパーティーに来てくれた棕田君は、私のお気に入りの一つ年下の男の子だった。かわいくておしゃべりだけどチャラチャラしたところがない。私は棕田君を軽い気持ちで誘ったことがある。

「遊びに行こうよ」  
「僕は今お金がありません」  
「お金なんてなかったって平気平気。遊ぼうよ」  
「僕は今、靴を磨いているので。さようなら」  
断られたショックより、面白い子だなあと興味を持った。

私は筆まめで、イギリスから便りをよく書いた。林君以外で一番返事を書いてくれたのが、意外にも棕田君だった。ただ彼は私と同じように筆まめなだけだった。

棕田君にクロケット・アンド・ジョーンズのグリーンシューズを買ってきてくれと頼まれて、「成田に迎えに来てくれたらお礼にプレゼントします」と手紙を書いた。これが作戦だった。

すぐに返事が来た。  
「僕は車を持っていません。車は大気を汚し、人を殺し、交通渋滞を招くので嫌いです。だから車で迎えに行くことが出来ません」

やっぱりすごく面白い。まあ靴を渡す時にはいくらなんでも会ってくれるだろう、と帰国が楽しみになった。

帰国すると、林君が入社早々入院しているという。一瞬「呪いが通じた」と思った。実際私はずっと「林君は絶対不幸になる」「幸せな結婚なんか出来ない」と念じていた。

お見舞いに行ってみたら可哀想になって、毎日のようにお見舞いに通った。病気で弱っている人には優しくしてあげないといけないのだが、一緒にいる時間が長いとつい余計なことを言ってしまう。

「わたしは林君が病気になった理由を知ってるよ」  
「え、なんで？教えて」  
「言わない。直ったら教えてあげる」

病人を脅す真似をしていたら、自分がバイクで転んで怪我をしてしまった。就職活動もままならない。「呪いは自分に還る」と言ったのは宇佐美君だったか、棕田君だったか。

四年生の六月から始めた私の就職活動は、相変わらずの超売り手市場にもかかわらず苦戦した。親も学校の就職部も心配した。

マスコミ、広告、デパート、アパレルなどの企業を受けてみた。本当は何がやりたいのかまだわかっていなかった。八月いっぱいまでかかってようやく、レジャー・アミューズメント系の会社の内定を得た。

就職活動が終わると、残りの学生生活をいかに楽しいものにするか、それが一番大事だった。棕田君とはなんだかんだ理由をつけて、みんなで頻りに遊ぶようになった。

猿木ゼミは前の代ほどみんなの仲は良くなかった。ゼミの後毎回飲みに行くということもなくなった。たまに宇佐美君ら卒業生と会うと楽しかった。しかし社会人生活の話を知ると「大変だなあ」と思った。

宇佐美君は生命保険会社に就職していた。彼も他の猿木ゼミのメンバーのように就職活動を始めた頃はマスコミ希望だった。

一九八八年の就職活動は超売り手市場と言われてはいたが、大手マスコミは狭き門だった。バブル景気で金融会社は学生確保に躍起になり、激しい拘束をかけてくる会社が多かった。適性というよりその拘束に絡まり、金融系の企業の内定を得た学生も多かった。

宇佐美君は自嘲気味に言った。  
「うちの会社は特にえげつない拘束をしてたね。東大や慶應、早稲田の『優秀な学生』は業界トップの会社に行くでしょう。だからうちの会社に決めるヤツってというのは、慶應・早稲田のやる気のないヤツか、東大・慶應・早稲田以外の六大学の優秀なヤツか、それ以外の大学のめっちゃくちゃ頑張ってる、やる気満々のヤツなんだ」

生命保険会社の新入社員研修では飛び込みのセールスをやらされる。彼は慶應出身のやる気のなさそうなヤツなのに、何千人もいる同期の中でトップセールスを取ったというのだ。

「もうね、宮沢りえの『サンタフェ』を何冊買ったことか。しかも営業エリアが決まってるから同じ本屋で、毎日買って。男への販促にはこれが一番。

後はペットを手なずけるんだ。骨の形の犬のおもちゃがあるだろ。あれを『はい』とか言って犬にあげると、飼い主がすごく喜ぶね。」

宇佐美君にとっては仕事もオフィスラブもゲームだった。  
「コピーとってもらって、『出来ました』って持ってくると『何時に何処で』ってメモと一緒にあるんだよね」  
必死にやってないところがまたかっこいいのだろう。彼がもてる理由はよくわかる。

私は林君に振られた現実を乗り越えつつあった。気持ちは椋田君にあった。でも、このみんなでワイワイ楽しい雰囲気壊してしまうのが怖くて、何も言えなかった。

なのに林君と会えば人肌が恋しくて、後で私は一体何をやってんのかと激しく後悔するようなことをして。

私は椋田君に言えない事はしない、と決めた。林君とは改めて私から決別しようと思った。別に椋田君はそんなことは望んでいない。私の勝手な決心だった。

椋田君に「好き」と言えるまで、一年かかった。  
「十文字さんは嫌いじゃないよ」  
一大決心をして告白したのに答がこれだった。次の日にはまた林君と、言えないような事をしてしまう。

自分でも何故かよくわからなかった。自分にとって良いことではないのはわかっている。椋田君に対しては罪悪感を持つ必要がない。そういう立場でしかないのも悲しかった。

今思えば、私がやっているのも恋愛ゲームだったのかもしれない。宇佐美君は新しい女の子を次々落すのを楽しんでいた。私はあえて自分に好印象を持っていない相手に挑戦するのを楽しんでいた、と言えないか。

そしてちゃんと「ウブなカタブツ」も「無理めの男」も私を大好きになった。長い時間をかけて攻略していったのだ。もちろんその時は真剣な恋のつもりでいた。

宇佐美君にはゼミのOB会や、友人の結婚パーティーで年に何回かは会った。仕事がらみで会う事もあった。

私が手配したガンズ・アンド・ローゼズのチケットを、彼が取りに来たのが一九九二年の、たまたまクリスマスだった。宇佐美君は「お礼に」と言って小さなクリスマスツリーをくれた。そういうさりげない心遣いが、彼のもてる秘訣だった。

私と宇佐美君のお台場クリスマスデートからもう五年も経っていた。

宇佐美君の仕事は相当ハードで、電話すると体調が悪いということも何回かあった。エイズ、肝炎の検査までちゃんと受けるところが宇佐美君だ。

宇佐美君は自分は遊んでいるくせに、「隣の子」が他の男と付き合うとショックだとか、社会人四年目となって「女遊びにも飽きてきた」と柄にもないことを言い始めた。

「一切のこだわりを捨てたい」とも言った宇佐美君がとうとう「隣の子」と結婚すると聞いたのは、一九九五年六月だった。

私は「おめでとう」と言ったすぐ後に「大丈夫？」と聞いた。  
「大丈夫だよ。僕は確かにチャラチャラ遊んでいるけど、彼女はそういうことしない。やっぱり彼女が一番面白い。俺、子供が欲しいんだ。だから離婚はしないと思うよ。実家は隣同士だし」

ご近所なのに両親と礼服を着て結婚の挨拶に行くと、先方の家族に普段着で迎えられたという話も微笑ましかった。

挙式披露宴をしない、いわゆる「ジミ婚」は宇佐美君の会社では異例だったらしい。直属の上司やその上の偉い人、元上司などにも挨拶に来いと言われ、何回も会食しなければならなくてかえって大変だったと聞いた。  
「そんなの付き合わされて、彼女も大変だねえ」  
「いや、彼女は美味しいものが食べられるって喜んでたよ」

一九九五年八月、宇佐美君の妻のお披露目で久しぶりにゼミのメンバーが集まった。宇佐美君の妻となった人に会うのは初めてだった。帽子のデザイナーをしていたこともあると聞いて、勝手にぶっ飛んだイメージを描いていた。

彼女は同じ年には思えないくらい可愛い人だった。仕立てのいい白いシャツに濃い落ち着いた色のスカート姿だった。にぎやかな人なのかと思ったが、初対面の人が多いからか、おとなしくしていた。

私の知らなかった宇佐美君の顔も見た。宇佐美君が「愛してる」とか「かわいい」とか、以前は「俺はそういうこと女の子に絶対言わない」と言っていた言葉を、みんなの前で連発するのは意外だった。可笑しかった。

ハワイで作った結婚式の写真集が素晴らしい出来だった。日本の写真とは光が違う。憧れた。

結婚祝にはインテリアショップ・アクタスで買ったトイレブラシをあげた。植木鉢がブラシケースで、ブラシが緑の芽になっているもので、私自身が前から欲しかった。翌年私と椋田君と一緒に住み始めた時には同じものを買い求めた。

宇佐美君の自慢はウォーターベッドだった。その使用方法と寝心地の良さを細かく説明してくれた。宇佐美君は本当に嬉しそうだった。

しかし十一月にはもう「結婚生活は忍耐だね」と言うようになった。  
「自分の時間が全く無くなったよ。でも僕は愛妻家ですけど」  
「自分で選んだ道でしょう」  
私がそう言ったら少しむっとしていた。何日もたたずに不安は大きくなっていった。  
「やっぱりダメ、向いてないかもしれない」

相変わらず仕事は忙しいようで、しかし遊ぶこともやめない。初めのうちは妻も一生懸命お料理を作っていた。翌年二月には宇佐美君は冷えたオニギリを食べる毎日になったと言った。

しばらく音信が途絶えて、一九九七年のクリスマス、この時はマライア・キャリーのチケットの手配を頼まれた。送付先を確認するために電話すると宇佐美君のお父さんに「横浜の社宅にいます」と言われた。しかし宇佐美君はチケットを実家に送ってくれと言う。どうなっているのだろうと心配になった。

一九九八年十月に、菅井が赴任しているカナダから夫婦そろって一時帰国した。またゼミのみんなで集まったのだが、これが宇佐美夫婦の危機説を聞く会のような状態になった。

宇佐美君の社宅には「オカマが住みついている」と言う。主が家に帰れずあちこち泊まり歩く日々だと言う。

宇佐美君の妻は、明らかに他の社宅の奥様たちとは違っていった。陰湿ないじめもあった。宇佐美君は仕事と遊びで忙しい。妻は働き始めると友達を家に引っ張り込むようになった。その中でも一番仲が良かったオカマちゃん、気がつくところまで生活を始めていた。

「不審な『女性』が出入りしている」と奥様連中の問題になり、宇佐美君は人事部から注意される。ますます家に帰りにくくなった。けれど彼は妻を責められない。もとはといえば彼が妻を放っておいたから、忙しすぎたからこうなると、彼はわかっていた。

たまにかかってくる宇佐美君の電話は、いつもチケットの依頼だった。そしてその度彼の身には何かが起こっている。  
「いつもありがとう。今回は巨人戦なんだけど、大丈夫かなあ」  
「いいよ。その後どう？」  
「実はやっと身軽になりましたよ、僕も」  
「え、離婚しちゃったの？」  
「そうなんだよ」

友達にも離婚経験者は何人もいたし、ゼミ仲間には再婚している人もいた。それぞれ大変なことだろうけれど、結婚したいから一緒になって、離婚したくなかったから別れた。お互い傷つくことはあっても、幸せに生きるために選んだ自然な流れだろう。

私は自分自身が体調を崩したり、椋田君の浮気発覚事件などもあって、そんな風に考えるようになっていった。

私にとっても、宇佐美君にとっても一九九九年は危機的な年だった。いや、二人の身に起きたことを、同じように並べることは出来ない。  
「俺、事故に遭ってさ、大変だったんだよ。マジで死にそうだった」

その時頼まれたのは格闘技プライドのチケットだった。電話の声はいつもと全然変わらなかった。

いつもと変わらない声、それが「奇跡」だった。

その話を聞いたのは二〇〇〇年八月十七日だった。私と桃井ちゃんと比良りんと清田君が、直接宇佐美君から話を聞くことが出来た。

ここだけは、はっきり覚えているんだ。ガバツと飛び起きた。看護婦さんと医者らしき人たちが駆け寄ってきた。それだけ。すぐまた気を失った。

よほど苦しかったんだろうね、無意識のうちに酸素吸入のためのチューブを引き抜いちゃったんだ。肺には折れた肋骨二本が突き刺さって、穴があいていた。吹き出す血にまみれて身を起こした。医者は慄てたらしい。

五日間意識不明だった。意識を取り戻す瞬間を何回か繰り返すうちにわかってきたんだ。どうやらここは集中治療室、計器の並んだカウンターに足を向けて放射状にベッドが二十台ぐらい並んでいる。隣のベッドとの仕切りはない。会話も聞こえない。うめき声があがるだけ。

よく見えないんだけど、隣のベッドの患者は、顔中傷だらけで言葉にならない唸り声を発していた。それだけわかって俺も再び気を失う。次に気が付くと隣のベッドがガラガラと運び出されている。また目がさめるとそのベッドはなくなっていた。

おそらくここ是最悪の状態の患者たちの部屋だ。病院の中で死に一番近い部屋なのかもしれない。やばい。

チューブを自分で抜き取ってから、両腕をベッドに縛られちゃった。ほとんど眠っているんだけど、目がさめても自分では何もすることが出来ない。食事は食べさせてもらって、おしっこがしたくなったら「おしっこ！」って叫ぶ。

目がほとんど見えなかった。会社は辞めなくちゃならないだろう、って思った。でも早くここを抜け出したいから見えないことは黙ってた。

それ以外にこれから話す事、入院中の状態なんかは後になって人から聞いたんだ。

瀕死の患者への治療には定評のある日本医大に運び込まれたのは一九九九年十一月十七日水曜日深夜。

赤坂の雑居ビルのトイレで血だらけになって発見されて、救急車で搬送されて来た。病院ではミスターXと呼ばれた。

身元が判明したのは入院から四日目。「ミスターX事件」担当の赤坂警察署の警察官が、交通課に立ち寄り小耳にはさんだ情報。「車検証に『宇佐美文也』とあるBMWが、フロントガラスが割られ、ボコボコの状態で青山に放置されている。」

そういえばミスターXが着ていた血だらけのスーツのタグには、クリーニング屋が書いたのか、消えかけた文字が「ウサミ」と読めた。

家族から捜索願も出ていた。警察からの連絡で病院に駆けつけた両親が医者から聞かされたのは、あまりにも残酷な診断だった。

脳挫傷、頭蓋骨骨折、外傷性くも膜下出血、肋骨骨折、肺腫。頭は二七針縫った。今後は両手足切断か、植物人間状態か、どんなによくても半年間は入院、退院しても車椅子生活だろう。両親はすぐさま家を売ることを考えた。

両親の連絡で上司や友人が見舞いに来た。意識があるときに三十人ほど面会したが「このひとわかる？」と聞かれて答えられたのは古くからの友人三人だけだった。

両手足がサツマイモ色になって腫れ上がった。後頭部を殴打されて右眼球が飛び出していた。頭の大きさも普段の倍ぐらいなった状態で病院に運ばれた。医師の所見が「年令二十歳ぐらい、がっしりした体格」だった。

まさに奇跡的に助かったわけ。

舎弟の小野達が見舞いに来た。これもそいつらから聞いた話で自分は全然覚えてない。車椅子を押してもらいながら病院の庭に向かった。

「おい、タバコ持ってんだろうな」と聞いた。

「え、まずいんじゃないの」、びびる小野。

そりやそうだ、集中治療室に入院中の、死の淵からやっとかさ這い登ってきた重傷患者がタバコを吸って良いわけがない。

「いいからくれよ」、仕方なくタバコを渡す小野。

なのに渡されたタバコを一口吸っただけでばいっと投げ捨ててしまった。あらら。

今度はどこへ行くのか。

「会社に行く、二時間で戻るよ」

しかし頭は包帯グルグル巻き、点滴を吊るして、パジャマにスリッパ履きという出で立ちだ。あろうことか、点滴袋をポケットにしまい込み、車椅子から立ち上がり通りに出てタクシーを停めようとした。

慌てた小野は看護婦を呼んだ。追いつかれたとき、ポケットの点滴袋には血が逆流していた。病室にもどると対処に苦慮する看護婦を尻目に、既に深い眠りについていた。啞然とする小野。まるで赤ちゃんがえりだった。

事件から九ヶ月経った今も刺激物は禁じられてる。特に入院中は病院食以外の食べ物は禁止だ。だけど見舞い客が来ると売店に行きたがり、目に入るもの全てを買おうとする。お菓子、飲み物、オニギリ、パン。お金は持っていない。見舞いに来た人を買わせる。

それを病室に戻るまでの間に食べようと、いきなりバリバリと包装を破いて、チョコレートを取りつかれたように食べる。そして食べかけをじっと見つめ、ぼいっと投げ捨てる。

すぐに次の包みを開け同じ事を繰り返す。ジュースを飲み始めたとき、車椅子を押す小野は焦った。液体をそこらにまかれて放り投げられてはかなわない。身構えていると「はい」と素直に缶を渡すこともあった。

そうして買い込んだ袋いっぱい食料をどうするんだ？と思いつつ病室につくと、またもや車椅子で眠りかけている。

こうして、半年はかかるだろうといわれた入院期間をわずか二週間半で終え、しかも普通病棟に移ることなく、いきなり集中治療室から退院した。

そもそもなんでそんな大怪我を負うことになったのか、全然わからない。事件より前、その日朝からの記憶を失っている。全身血だらけで発見されたのは、表参道のビルのトイレの個室。車のキーはポケットの中にあった。

警察には「青山から赤坂に向かって、血だらけで裸足の男がふらふらになりながら歩いている」という通報が何回も入った。帰巣本能で実家に向かっていたのでは、と思う。

大破した車は、青山に乗り捨てられてあった。事件は一九九九年十一月十七日水曜日の深夜一時半頃。人通りの少ない道。目撃者の証言も様々だった。

ある小学生は「一対一だった」といい、またある人は「大勢が一人を取り囲んでいた」という。男だったと言う者もいれば「女を見た」と証言する人もいた。

オヤジ狩り？現場付近ではそういう類の事件はあまり聞かない。

痴情のもつれ？会社の上司はその線を睨んでいた。確かにその手のトラブルは絶えないが、その時期・その日にそこまでのことをされるような覚えはない。

外国人による強盗殺人未遂？ロレックスの時計と現金全てが盗られた。しかし各種クレジットカードや鍵は手をつけられていない。

会社では宇佐美にも犯罪行為があるかもしれないという疑いもあり、事件については緘口令が敷かれた。どうやら彼はまるっきり被害者のようだという見解がでたあとも、外部に漏れるのを恐れ大掛かりな捜査はしなかった。

捜査は暗礁に乗り上げたままだが、追究するのも疲れる。まずは体力をつけなければ、と思った。

そして十二月半ばには仕事に復帰する。今でも脳の画像を見ると三箇所色が全く違うところがある。その場所がたまたま運良く、言語、記憶、運動に大きく影響するところではなかったために、奇跡的に回復した。

二年間、タバコ・酒・運動・刺激物・高所作業・セックスを禁じられた。が、少しずつ破っている。徹夜は出来なくなった、早く寝る。恐ろしい夢を見る。生き物を殺せなくなった、蚊でさえも。怒らなくなった、キレたら死ぬ。

何より子供が欲しい。自分の遺伝子を残しておきたいと思う。

宇佐美君の話聞いた三人は、不思議な感覚に襲われた。今、目の前にいる宇佐美君は以前と少しも変わらない調子で話している。本当にそんなことがこの身体に起こったのか。この脳がそんな損傷を受けているのか。

宇佐美君はそれほどの壮絶な地獄から生還した男なのか。ここまで悪運の強い男の子供なら、産んでみたいという女は結構いるのではないか。

この話を聞いた一ヶ月後に、私は婦人科系の手術を控えていた。それは命に関わるような大変な手術ではない。しかしニュースでは続発する医療ミス事故が大きく取り上げられ、私も少なからぬ不安を抱いていた。宇佐美君の一件は信頼できる病院もあるということを知ってくれた。

阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件の時も考えたが、本当に命が危機的状態に陥った時、生死を分けるものは一体なんなのだろう。それはいかに普段から健康に気をつけているかとか、鍛えているかとか、ましてや「日頃の行い」などではないようだ。

それをただ運命というのはつまらない。だけど人は簡単に死んでしまう。私はきっと小さなダメージでもすぐに死んでしまうだろう。だったらやりたいことだけをやろう。やりたくないことはしないで生きていこう。通用



しないかもしれない。でも好きなことをやってみよう。

そう思って、私は二〇〇〇年末で会社を辞めた。

私は宇佐美君の事件の真相を知ることが出来ないか、と考えた。誰が彼をこんな目に合わせたのか、同じ苦しみを味わせてやりたい。

警察はちゃんと捜査したのか疑問だった。新潟で九年間監禁されていた女性が保護された時の警察の不祥事発覚をはじめ、警察のでたらめさが次々発覚したのは宇佐美君の事件の後だ。私は警察に対して強い不信感を抱いた。

何故、彼は事件後明らかに事件にかかわった者が使用したと思われる携帯電話の使用料六万円を支払わなければならないのか。何故本人が照会しても通話記録は開示されないのか。

会社を辞めて時間のある私が、彼に協力できることは無いのかと考えた。弁護士の友人や警察問題に詳しいジャーナリストの知人に話をぶつけてみた。もう一度きちんとした捜査を求めたらどうか。方法はあるのではないかと思った。

しかし、宇佐美君自身はそれを望んでいなかった。彼は健康を回復することが第一優先で「犯人を捕まえたところでどうなるわけでもない」と言った。

「警察も初めは熱心にやってたよ」  
被害者本人がそう言うのなら、私が出る幕ではなかった。

事件から一年半が経過した春の日。宇佐美君が事件当夜着ていたスーツがそのままとってあるという。桃井ちゃんと一緒に彼の部屋に見せてもらいに行った。

自由が丘の和食レストランでランチを頂いて、事件でボコボコにされたのを直したBMWのオープンカーに乗って、宇佐美君が一人で住むマンションの部屋に向かった。

宇佐美君の部屋は入るとすぐたくさんの洋服がハンガーに掛かっていた。オレンジと、黄色のソファが一つずつ、さらに大きな椅子、オレンジのカバーが掛かったベッド、テーブルの上にはワープロ、ベッドサイドにはいくつもの目覚し時計があった。

「離婚して一番悔しいのが、慰謝料より何よりウォーターベッドを取られちゃった事。あれ、気に入ってたのになあ」

「そうだったよね」  
トイレを借りると私が結婚祝にあげたトイレブラシがまだあった。桃井ちゃんが言った。  
「これ、私も使ってる」  
三人は同じゼミで、同じトイレブラシを使う仲だった。

宇佐美君がスーツカバーに入った件のスーツを取り出してきた。  
「全然カビとか生えてないんだよ、不思議でしょ」  
ビギの紺のスーツ、プリンシプのネクタイ、タケオキクチのクリーム色のシャツ、全てが血だらけだった。ジャケットは脇が引き裂かれていた。シャツは血液で茶色くガビガビになっていた。

桃井ちゃんも私も一瞬言葉を失った。これだけの出血でも助かったのか。  
「臭いもないんだよ、なんでかな？触っても大丈夫だよ。血液検査は全部クリアしてるから。エイズも肝炎も」  
私はスーツに鼻を近づけてみた。なるほど何の臭いもしない。  
「捨てられないんだよね、こうして見に来てくれる人もいるし」

宇佐美君の本当の気持ちはわからない。それは「インテリア代わりになるかと思ってさ」と言ってテーブルの上に置いてある、シャープのワープロの意味と同じぐらい、他人には計り知れないものがある。

宇佐美君の日常はすっかり仕事漬けだった。  
「女の子とはさんざん遊んでもういいやって気分。もともと僕は淡白なの。それで別れるってパターンも結構ある。仕事はけっこうきついし、最近はパスタを作るぐらいかな、楽しみは。  
月に一回病院に行って『どうですか』なんて話をしたり脳波を取ったり。薬はコンビニ袋みたいのにいっぱい。これでも減ったんだけど。」

せっかくこの世に生還したからには、面白おかしい人生をエンジョイして欲しいと思う。今はまだ体のことを考えて、じっとしている方がいい時期なのかもしれない。

私は不遜にも宇佐美君の力になりたいなどと思った。しかし、またしても私の方が彼に助けられることが起こってしまうのだった。

私の方は会社を辞めて、そんなこんなの日々をインターネットのホームページで公開していた。本当にやりたいことを求めて迷いもがく姿、棕田君とのスイートな同棲生活もウェブ日記に書いていた。

ところがゴールデンウィークに、またしても棕田君の浮気事件が発覚した。甘い日記が一転修羅場赤裸々告白調に変わってしまった。宇佐美君は、私のウェブ日記を見てメールをくれた。

「最後にどんな結末を望むかイメージ。

見方としては、『自分の将来』『相手の将来』『二人の将来』があると思うんですが、まずは『相手の将来』です。”相手にとっての理想的なGOAL”に、自分自身が果たしてどこまでSUPPORTできるのか、を見極めるべきです。

ちょっと”犠牲精神”が強すぎる発想ですが、何かを決心した時、その後の状況如何によって、迷いが生じた時の”自己防衛”にもなる便利な考え方です。」

このアドバイスには解説が必要だった。電話をすると会って話そうと言ってくれる。変わらないフットワークの良さや優しさが、学生時代の深夜のデートを思い出させた。

「浮気はどんな男でもする。悪いことじゃないよ」

「悪いことじゃなくても、私はされたら嫌なの」

「セックスレスカップルなんていっぱいいるよ。結婚して子供がいたら大体そうだよ」

「世間のカップルと同じじゃ嫌なの、世界最強のカップルがいいの」

「無理だよそれは。そんな男はいない、メチャクチャ難しいよ」

私はメチャクチャな事を言っているのだろうか。

「女の子はさ、すぐ『どうするつもり？』とか決断を迫るけど、関係を壊したくないなら問い詰めたら駄目。代償を求めればいいんだよ。『なんか買ってくれ』とか『どっか連れてけ』とか。相手も必死でやるだろう。」私にはそれで気が済むとは到底思えなかった。

話は済んだらと帰りたいがる宇佐美君を引き止め、車で家に送らせ、棕田君が出て行った部屋にあげる。

「ねえ、私っていい女だと思わない？私に愛されたら男冥利に尽きると思うんだけど」

「うんうん、思う。思わなければここにいないよ」

「マドンナみたいでしょ、強くてセクシーで」

「……。いいなあこの部屋！すげえいい！棕田君もかっこいいねえ」

宇佐美君は、茶棚とその上にある写真立てを指差した。

宇佐美君もかなりいい男だと私は改めて思った。今までも面白くて大好きだったけど、この日はしびれた。本当に生きて選んできて良かったと、彼が帰って一人になった部屋で感謝した。

電車の中で若者ともめたチェース・マンハッタン銀行員は重体だったがこの日亡くなった。天災やテロなどではない些細なことでも人は死ぬ。殺されてしまうかもしれない。

だから私は愛の出し惜しみはしたくない。全力で愛したいし、ちゃんと向き合っていなくちゃいやなんだ。

宇佐美君は棕田君の肩を持ちながらも、こう言った。

「十文字さんの理想の新しい男を探すのは難しい。だけど、自分だったらそっちへ行く。僕は少なからぬ数の女の子と付き合ってきた中で、得たものは多いよ」

何日か考える中で私なりの結論が出た。

他人をコントロールすることはできないから、自分が変わるしかない。これからは「生涯のパートナー」などとは言わない、目指さない。「今最高のパートナー」でいい。

男が挑戦したいと言うなら「女」としてチャンスを与えよう。

この先別れることになっても「十年間は何だったの？」とは考えない。「面白かった、思う存分愛した」と言いたい。

私は続けられるのに相手が女として見られなくなったのは残念、悲しいけれど私にはどうしようもない。それは彼の能力であって私の責任ではない。

私は常識なんてぶっ飛ばす女として、自分のやりたいことをやり続ける。素敵な男が現れれば、全力で愛する。それは一瞬で終わるかもしれない。でも一生懸命好きなことに打ち込んでいけば、女としても磨かれていくだろう。

宇佐美君に電話で「私は決めた」と言った。すぐに会いに来てくれた。丁度私にメールを書こうとしていたところだったらしい。「僕の気持ちを」と言うので、告白されるのかと思った。恋愛相談にのるうちに好きになってしまうという、よくあるパターンか。そうではなかった。

宇佐美君は私の選択を「安心したよ。感心はしないけど」と肯定してくれた。

あとは棕田君が彼の将来像と二人の将来像を示してくれるのを待つのみだった。ところがこれがなかなか出て

こなかった。宇佐美君の

「何らかの話し合いが持たれるんでしょうけど、多分結論はできません。問題に彼が直面したのは、この三、四日間のことですから。それ以前（浮気進行中）に彼が、この問題について真剣に考えていたとはとても思えません

。もし彼がすぐに答えを出したとしたら、彼は相当な決断力の持ち主でしょうね。」  
という予想を大きく超えた。

そうして時間軸が伸びていくうちに、私の棕田君に対する愛の濃度と決意の硬度は下がっていった。

意外なことというか、当然のようにというか、私は気がつくやうに宇佐美君のことを考える時間が増えていた。

恋愛相談の会話の中で、私は宇佐美君が離婚を深く後悔していることを知った。彼はやっぱり元妻が好きなんだ。宇佐美君は自分の浮気心のせいで妻を傷つけ、自分が本当に欲しかったものを失ったことに気付いていた。

私は宇佐美君に聞いてみた。

「もし、これから浮気を絶対しないなら再婚してもいいって彼女が言ったらどうする？」  
「それは難しい！さんざん遊び尽くした今なら浮気をしないで済む方法もわかる。できると思う。  
でもそう条件付けられると躊躇してしまう。元カミサン（名前はミカさん）に『浮気なんかどうでもいいからあなたと一緒にいたい』って言われたらグッとくるね。その方が絶対しない、という気になる」  
勝手なことを言ってるなあ、と思いながらも正直で悪くない。

「宇佐美君、仕事ばかりじゃつまらないよ。あなたにはそのへんの女の子じゃなくて、どこかの国の令嬢とか結婚している芸能人とかと道ならぬ激しい恋でもして、面白い話を聞かせて欲しいよ」

そう言いながらも、そういうのが面倒ならよく知っている私っていうのもあり？と考えていた。

五月三〇日は宇佐美君の誕生日だった。学生の頃彼は「僕の誕生日はゴミゼロの日です」と自己紹介していた。

いまだに結論の出せない椋田君にほぼ希望を失っていた私は、誕生日を一緒に過ごす特別な人がいない宇佐美君を誘った。

私が指定した目白の割烹「太古八」に現われた宇佐美君はちょっぴり動揺していたようだった。それは妙に気合の入ったおしやれをした私に、びびっていたわけではなかった。

「転勤だって、今日内示」

「え？何処に」

「沖縄」

「嘘！そんなところに転勤なんてあるの？」

「僕がどうこうじゃなくてね、左遷じゃないから。会社の都合で少しの間だけほとぼりを冷ます役というか」

「私も行く！」

「え？」

「行きたい！沖縄行きたいよ、行ってもいいでしょう？」

「まあ、ちょっと待って」

「いつ行くの？」

「六月一日付」

「見送りに行く！」

「いいよ、どうせプライベートではちょこちょこ帰って来るし」

「絶対行く！行かせて、お願い。とりあえず見送る」

沖縄沖縄沖縄。私は沖縄が大好きだった。何かが大きく動き始めている気がした。

「そうだった、忘れてた。お誕生日おめでとう！カンパニー！」

「まあいいか、カンパニー。どうもありがとう」

その夜の事は興奮しすぎてよく覚えていない。

六月一日、空港にはギリギリに着いた。走った。時計の下のベンチに座って、宇佐美君がこちらを見ていた。息切れした。

「ごめん、ごめん。またしても遅くなって。」

「わざわざ悪いねえ」

「あのね、一昨日、プレゼント、渡さなかった」

「いいんだよ。うまかったよ、あの店」

「今日、プレゼント、持ってきた」

「そうなの？」

「うん、あれ」

私は、今私が駆け上がってきたエスカレーターの方を指差した。頭の前からゆっくり見えてきたのは宇佐美君の元妻ミカさんだった。

私はミカさんに見えるように「ここだよ！」と手を振った。宇佐美君は言葉を失っていた。

「昨日椋田君帰ってきた。沖縄には二人で行くよ」

宇佐美君は歩き始めた時何か言った。搭乗を促すアナウンスとかぶって私には聞き取れなかった。